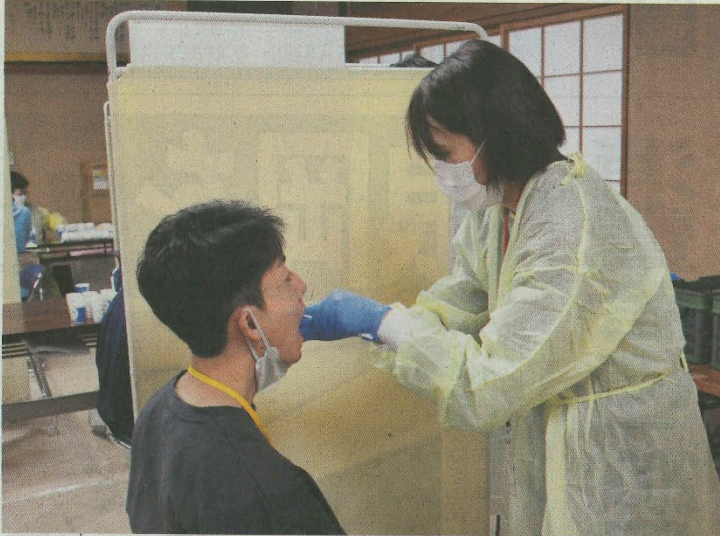


1321人 3000項目測定へ



弘大 21年目 岩木健診始まる

弘前大学が中心となって取り組む大規模な住民合同健診「岩木健康増進プロジェクト」(岩木健診)が31日、岩木文化センターあそべーるを主会場に始まり、参加者が

約3000項目にも及ぶ健康データを測定した。6月9日までの期間中、市民1321人が受診する。

(稲葉智絵)

大手企業などが58ブース

岩木健診は今年で21年目。昨年に引き続き、対象者を市全体に拡大して実施。肌の潤いや張り、色から健康状態を調べる資生堂、運転時の注意力や予測判断力を測るマツダといった大手企業をはじめ、唾液によるがんリスク検査の研究を進める大学発ベンチャー企業のミルテルなど58のブースが設けられた。

初日は119人が受診。新たに調査項目に加わった江崎グリコの「メチル化」のブースでは、老化の指標とされる「DNAメチル化」を調べるため頬の内側の粘膜を綿棒で採取し、再び項目に加わった同大の「脚筋力」では専用の機器を使って太ももの前後の筋力を測

受診者(左)の頬内側の粘膜を綿棒で採取する江崎グリコのブース

った。

会社員の三上清美さん(59)は今回の受診が16回目といい、「一般の健診にはない項目が多数あり、自分の体の変化を細かく知ることができるのが魅力。夫や子どもたちも受診しており、家族で健康への意識が高まり、生活習慣を見直す

ことにもつながっている」と話した。

プロジェクトの立ち上げから携わる弘前大の中路重之特別顧問は「岩木健診の健康ビッグデータが起点となり、健康都市弘前の取り組み、健康教育、QOL健診などが生み出されてきた。参画企業や連携大学との研

究、開発にもつながっている」とした。21年目という新たなスタートを切ったことについて「地域に生み出す経済効果は徐々に大きくなっている。短命県返上という目標を達成することにも、世界が注目するデータを集めるためにも継続していききたい」と力を込めた。